**2016年3月31日 詩編を読もう：あなたがたに平和があるように(詩編122編)**

今週は、聖書日課で来週の月曜から水曜日に与えられている詩編、122編を読みたい。　いつものように、気になる言葉、あるいはインパクトのあった言葉や節は何かを挙げる。次に、詩編の作者の気持ちになってどのようなことを詠っているか、考える。そして神は、今の私たちに何を語っているのか、思いを巡らせよう。

詩編 122編

1:【都に上る歌。ダビデの詩。】主の家に行こう、と人々が言ったとき／わたしはうれしかった。

2:エルサレムよ、あなたの城門の中に／わたしたちの足は立っている。

3:エルサレム、都として建てられた町。そこに、すべては結び合い

4:そこに、すべての部族、主の部族は上って来る。主の御名に感謝をささげるのはイスラエルの定め。

5:そこにこそ、裁きの王座が／ダビデの家の王座が据えられている。

6:エルサレムの平和を求めよう。「あなたを愛する人々に平安があるように。

7:あなたの城壁のうちに平和があるように。あなたの城郭のうちに平安があるように。」

8:わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。「あなたのうちに平和があるように。」

9:わたしは願おう／わたしたちの神、主の家のために。「あなたに幸いがあるように。」

気になる言葉やインパクトのある言葉、「平和があるように」

詩編作者の気持ちになって、与えられた詩編を振り返るが、120編から134編は、みな最初に「都に上る歌。」と書かれている。　イスラエルの民が、過ぎ越し祭、七週の祭、仮いほの祭、の3大祭りに参加するために、そのつどエルサレムに上ってきていたことが、生活の習慣になっていたと思われる。　そのような環境の中で、エルサレムに上る歌として、15編が詩編に編算されたのだろう。　1-2節では、エルサレムに上ることの喜びが表現されている。　詩編作者は、その友人たちが「エルサレムに行こう」と言ってくれたことに大きな喜びがあったことを詠い(1節)、そして、いざエルサレムに着いたときは、まさにわたしたちは、エルサレムの城門の中にいます！と歌い出したい（というか事実、歌っているのかと思うが）くらいの歓喜の気持ちがこもっているように思う(2節)。　3-5節では、なぜエルサレムに上ってくるかの理由が詠われているようだ。　まず、歴史的に、南北イスラエルが統一され、神殿が建てられた都、エルサレムということを詠い(3節前半)、イスラエルの12部族、すべての部族がエルサレムに上り、感謝をささげるのは当然のこと(3節後半から4節)。　エルサレムにこそ、主の裁きの座、南北イスラエルを統一したダビデ家の座が据えられているから(5節)。　そして、6節以降では、平和・平安への祈りと人々が導かれる。

さて、この詩編の言葉を通し、主なる神は、今日、私たちに何を語りかけているのか考えたい。4月3日の礼拝は、復活の主イエスキリストが、復活した日曜日の夕方に、ヨハネ20章19節以降が読まれる。　はじめて弟子たちの前に現れ、話しかけるときのことだ。　十字架刑にかかるイエスを眼前にして、なんらそれを防げなかった弟子たち、逃げていって弟子たち、それゆえ、自分たちの罪や恥を思い、震え、おびえていた弟子たち、部屋に閉じこもっていた弟子たちがいた。　そのような弟子たちを、いっさい叱ったり非難したりすることなく、「あなたがたに平和があるように。」と言われたイエス。　その言葉は、イスラエルの歴史の中で、数百年詠われつづけていた詩編の中からの言葉と同じ言葉だった。　そこには、神が自ら創造された、人類への思いが、ひしひしと表現されているのだと思う。　「あなたがたに平和があるように。」アーメン

安達均